

花園大学
日本文学科
通信

第7号
通巻35号

二〇一四（平成二十六年）六月十日発行
編集・発行 花園大学日本文学科
〒604-8456 京都市中京区西ノ京壺ノ内町八一
TEL (〇七五) 八二一―五二八一（代）
振替 〇一〇五〇―一四三九九五

人の「縁」

川戸 昌

昭和の末年まで国文学科（現在の日本文学科の前身）の教員をしておりまして、川戸昌です。平成に変わる年に予備校講師に転身しましたが、それがもう四半世紀前ですので、随分と「古いやつ」になってしまいました。年齢も、馬齢を重ねて六十七歳です。

ところがおもしろいもので、退職で大学と無縁になった、ということはありませんでした。その後、年賀状のやりとりだけでなく、教え子から書展の連絡をもらって顔を出したり（実は「書」はさっぱり分からないのですが）、また便りや電子メールが届いて一緒に飲みに繰り出したり。特にごく初期に教えた二十九回卒業生からは同期会の案内を欠かさず送っていた。都合のつく限り出席しております。ここでは卒業生だけでなく旧教員の方々とも顔を合わせることができ、懐かしい昔話をしております。

三十歳過ぎで着任しましたので、在職中は若手（相対的にですが）教員として、教職志望学生を鍛

える軍曹の役割を自ら任じていました。実際、かなりの卒業生が教職についたのはうれしいことです。しかし、その彼らがぼつぼつ定年のことを考えねばならない年齢になってきているので、まさに往事遙かです。

また、この春には、旧教員だった方から日本語文法に関する質問を寄せられ、頭の中のほこりを払い、かつての講義内容を思い起こして、「こんなことではないでしょうか」と何とかお答えし、その後、杯を酌み交わしました。

在職中は、とにかく目の前のことに何とか対応していたに過ぎませんが、それでもやったことはそれなりに足跡を残していると、右の様子が教えてくれます。何かの縁はどこやらここやらでつながっているのでしょうか。そういえば、私の家は臨濟宗妙心寺派の檀家でした。別にそんなこととは関係なく、着任したのですが。

それにそもそも、今の妻も、卒業生のご母堂に紹介していた。だいて結婚したのです。私の教え子↓その母上↓その友人↓その娘、と縁が繋がったわけですね。

素人ですから、仏縁がどうこうとまでは申しませんが、人間、どこでどんな縁につながっている

日本文学会 公開講演会（聴講無料）

日時 六月二十八日（土）

午後一時三〇分〜四時四〇分

場所 花園大学・拈花館二〇二教室

講演

『竹取物語』正保三年刊版本の成立

― 依拠した古活字本の検討 ―

花園大学教授 曾根 誠一

谷崎潤一郎

― その愛と作品 ―

武庫川女子大学教授 たつみ都志

か、不思議な気がします。皆さんとも縁があれば、どこかでお会いして、ちよつと一杯のおつきあいをするのもあろうかと思われまふ。

（本学旧教員）

師の教えを胸に

池田 孝治

二〇〇一年三月に書道コースを卒業以来、はや十三年。先日、久々に書道共同研究室や実習室のある直心館周辺を歩きましたが、自分の学生時代とは多少違った景色がそこにはあり、否応なく時間が過ぎていたことを実感しました。共同研究室に入り浸っていたあの頃を、懐かしく思います。

今年三月末、十一年間の公立高等学校での講師生活に終止符を打ち、四月より私立女子中高一貫校に奉職することとなりました。公立学校の教員

採用試験における「書道」の採用枠は極端に少なく、将来に不安を抱きながらの日々を過ごしてきまされたが、運・縁に恵まれ正教員としての道が拓かれました。漸くスタートラインに立ち、今、ここからが本番と、意を新たにしています。

現在は、中学三年生の学級担任、中学校「習字」および高等学校「芸術科書道」の授業を担当しています。中学校「習字」は、本来、中学校学習指導要領において「国語科」の課目「書写」ですが、勤務校では全国的にみても珍しく、独立した科目として設定し、中学生が全員、週に一時間、墨を磨り、筆を執っています。

この「習字」の授業を通して、生徒たちへ何ぞの様に伝え、身につけさせることができるか……試行錯誤の毎日です。つまずいたり、迷ったりしたときには、学生時代に下野健児先生をはじめとする、多くの先生方からご教示頂いた事柄に立ち返ります。今更ながら、花園大学で書を学ぶことができ本当に良かったと、しみじみと感じます。今後も先生方の教えを胸に、地道に頑張っていきたいと思えます。

折に触れて、書道コースの現状等を耳にします。花園大学に限らず、少子化等、さまざまな要因が重なり、書道は非常に厳しい状況下にあります。現状を打破するには難しいものがありますが、母校書道コースの隆盛を心から願ってやみません。

(平成12年度卒業生)

みんながってみんなない

福井 智子

縁あって小学校の講師として働き始め、今年で13年目になりました。一日が慌ただしく忙しい毎日ですが、子どもたちの笑顔と学校が楽しいという声で、何とかがんばってやっています。

さて、昨年2年生の担任をしていたことです。担任していたクラスのAさんには、先天的に心臓に重い障がいを持つ弟のS君がいます。今年度そのS君が、同じ小学校の特別支援学級に入学することになりました。Aさんのご両親は、S君の学校生活のことと共に、姉のAさんのこともとても心配していました。重い障がいを持つ弟がいてかわいそうと同情され、特別な目で見られるのではないかと。Aさんと同じクラスの友だちの中にも、S君のことを知らない子がいます。Aさんのためにも、まず自分たちがS君のことを正しく知り、校内の人権集会でS君のことについて、クラス発表することになりました。Aさんのご両親とも何度も話し合いをして、発表の内容を決めました。

まず最初に、AさんからS君のお家での様子を教えてもらいました。次に、お母さんと一緒にS君に学校に来てもらって、一緒に簡単な活動をしました。お母さんからはS君が生まれたときの話や何度も入院をしていることや、大きな手術をしたときの話を聞きました。涙ながらに話される姿や内容に、私も涙を抑えられませんでした。子どもたちも真剣にお話を聞いていました。S君の病

気のこと、学校生活をするために周りが気をつけなければいけないこと、一緒に仲良く遊ぶ方法など、聞いて知ったことを各グループでまとめ、人権集会で発表することができました。Aさんのお母さんも見に来てくれて、発表を喜んでいました。何よりもAさんが自分の弟のことを、堂々と発表できたことがうれしかったです。

今年の4月。入学式でS君と初めて全校児童が対面しました。だれも偏見を持たず、新しい仲間として受け入れていました。しかしS君が学校に来たのは入学式の日、一日だけです。翌日からまた入院してしまいました。S君が一日も早く、元気に学校にくることを願っています。

(昭和63年度卒業生・神辺小学校講師)



私の挑戦

池田 真季

大阪府松原市の教育支援センターは不登校の子ども達の居場所として、また日々の活動を通して子ども達の学校復帰を援助する場として設立された。私はそこで教育相談員として勤務し、今年で19年目になる。

振り返ると大勢の不登校の子ども達と出会い、悪戦苦闘の毎日であった。今までの経験から、私が頑張りすぎるよりも、子どもにとつて「期待はずれ」になるほうが、子どもの「力」になるとわかった。そして、この「期待はずれ」になることが、本当に難しいのである。

難しさのひとつは、子どもがそれを認めないことである。子どもの中には、自分の問題を自分で抱えられずに無意識に私に問題を投げ込んでくる子が多い。そして私を理想化し、私が問題を解決することを期待しているのである。だから私が本人の問題として本人に考えさせる問いかけをする、と、たちまち抵抗が起る。例えば休み出ししたり、自分の弱さをアピールしたり、イライラしたり、私を攻撃したりするのである。そうまでして、私に自分の問題を肩代りしてほしいと思っているのである。

もうひとつの難しさは、私自身の「不安」である。子どもの問題を肩代りしても、それはその場だけのものであり、本当の解決になつていない。それどころか、子どもの成長のチャンスを奪っている

ことに気付いた現在でも、子どもの抵抗で問題が前に進まない、自分が無力な人間であると感じ不安になる。その不安を消すために「子どものため」に肩代りをしている自分に気付く。

「期待はずれ」になることは本当に難しい。子どもの抵抗と私の不安との我慢比べである。時には勝つ。そんな時は「あなたに今どんなことが起こっているの？」と問いかけると、自分の感じていることを口に出す。そうすると、自分が思っているよりも怖くないと気付く子もいる。時には負けて、一生懸命肩代りをしてしまう。そんな時は、子ども達が安心して自分のことを考えられる場を提供することが大切であり、それが私の仕事だと思ひ直し、また挑戦するのである。

(平成6年度卒業生)

花大での学びに支えられて

福田 博則

早いもので、学部を卒業してから15年がすぎた。大学院を修了してからでも13年経つ。気がつけば四十路が近くなり、体型にもかなり貫禄(?)が出た。気持ちではまだまだ若いとは思ひながらも、職場でも中堅の年齢層に入ってきており、ここでも時間の経過をしみじみと感してしまふ。

私は今、高校の国語教師として教壇に立っている。進む予定ではなかった教員の路に飛び込んだのは、大学時代にお世話になつた芦谷信和先生の勧めあつたことだつた。そのため大学院二年目から教員免許取得をスタートさせた。無謀な挑

戦のように思われたが、修士論文を書く傍らでほとんどすべての単位を取得することができた。修了後にもう一年科目等履修生として在籍し、教育実習に行き、無事に免許を取得した。その後、郷里である島根県に戻り、同地の教壇に立つこととなった。

もつとも、順風満帆に勤められたわけではない。始めは常勤講師からスタート。その後数年間は各学校を転々とし、果ては日本海洋上に浮かぶ隠岐島での勤務も経験。後醍醐天皇に自身をなぞらえたわけではないのだが、七年前に「島抜け」をし、愛知は尾張の土地に新たな活路を見い出すことができた。

卒業後、かなりの流浪転変を繰り返したが、その間私を支えてくれたのが、実は花園大学での「学び」だつた。学部・大学院を通して芦谷信和先生の薫陶を受け、谷崎潤一郎研究に夢中になつた。卒業後も研究を続け、何度か『日本文学論究』に投稿もさせていただいた。仕事で苦しい時も、楽しかった文学研究のことを思い出すと勇気を奮い起こすことができた。

大学入学時は、受験疲れもあつて、どちらかというと「学ぶ」ことにアレルギーを感じていた私だつたが、大学での研究を通して「学ぶ」ことの価値を見いだし、今や「学ぶ」ことに関する仕事についている。振り返つて考えれば、花園大学には感謝してもし足りない。

今の課題は目の前の生徒たちに、いかに「学ぶ」楽しさを教えていくかであるが、まだまだ暗中模索。奮闘中の日々である。

(平成10年度卒業生・愛知県立津島東高校教諭)

『花園大学 日本文学論究』 第6号

(二〇一三年二月刊)

- ・万葉集巻一の自然詠歌
— 海洋的自然への眼差し

丸山顕徳

- ・石作皇子の条・再読

曾根誠一

- ・『椿説弓張月』の「虬の珠」と『日本書紀』の「潮満瓊」「潮洞瓊」

久岡明穂

- ・「春琴抄」の周辺

- 内田百閒「柳検校の小閑」への影響を考える

福田博則

- ・古本説話集 本文と注釈

- 上巻第二話公任大納言屏風歌遅進事

新聞水緒

- ・受贈図書目録（平成二十四年一〇月～同二五年九月）

*購入ご希望の方は、五百円（送料込み）を、お振り込み下さい。折り返し、郵送いたします。

京都学・夏期公開講座（聴講無料）

【日時】八月一日（金）～三日（日）

午後一時半～四時半

【場所】無聖館 五階ホール

【講演テーマ】「京都の底力」
ポテンシャル

一日（金）「教育と企業の土壌」

二日（土）「地の力の底力」

三日（日）「伝統文化の精神風土」

*講演題目と講師（各二人）等の詳細は、

一か月前までに、花園大学ホーム・ページに掲載します。ご確認の上、是非ご参加下さい。

編集後記

*先ず、ご多忙の中、ご執筆いただいた皆様に、厚く御礼申し上げます。

この「通信」は、皆様方のご厚意で成り立っていることを、再確認した次第です。ありがとうございました。

*今号は、はからずも、教育現場に携わっておられる旧教員の川戸昌先生と卒業生の皆さんの特集号になりました。皆さんのご活躍を拝読して、心強く思っております。

また、在学生の皆さんも、後に続けていただきたいと願っています。

*日本文学科の近況としましては、書道コース主任の下野健児先生が今春学生部長に就任され、超多忙な日々を過ごしております。曾根は図書館長（再任）に就任しました。

*6月28日（土）には、日本文学会の公開講演会が開催されます（1頁下段参照）。卒業生の皆さんにも、是非ご参加いただきたいと存じます。今回は、谷崎潤一郎の研究で高名な武庫川女子大学教授たつみ都志先生をお招きして、講演をしていただきます。

学科からは曾根が出て、前座を務めます。正保三年刊の最初の整版本『竹取物語』の本文が古活字11行丙本に依拠していることを、お話しします。（終了後、ささやかな懇親会あり。こちらもご参加ください）

*また、8月1日（金）～3日（日）には、京都学・夏期公開講座が開催されます（上欄参照）。今年の担当は、創造表現学科で、今井隆介先生が中心になって、「京都の底力」という統一テーマで準備を進めておられます。

詳細を大学のホームページで確認の上、是非ともご参加ください。お待ちしております。

*『日本文学論究』第6号（上欄の目次参照）は、久しぶりに上代文学から近代文学までの各時代の論考が揃いました。関心を引くものがありましたら、お目通しくだされば、幸いに存じます。

(曾)